

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隷書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期	
嫁	カとつぐ よめ 常①		嫁 睡虎地秦簡	嫁 馬王堆			嫁 春秋穀梁伝集解	嫁	嫁 大聖武	
				嫁 武威漢簡				嫁	嫁 伝空海急就草	
嫌	ケン ゲン いや まらう うたがう 常①		嫌 包山楚簡	嫌 説文・女部			嫌 穆玉容墓誌	嫌	嫌 杜家立成	
嫌							嫌 春秋穀梁伝集解	嫌		
嫉	シツ にくむ ねたむ そねむ 常①		嫉 説文・人部				嫉 薄美人墓誌	嫉	嫉 豊替指歸	
			嫉 説文或体				嫉 原山雲居寺石經	嫉		
嫡	チャク チキ よつぎ 常①		嫡 説文・女部		嫡 智永千字文	嫡 智永千字文	嫡 元熙墓誌	嫡	嫡 干祿字書	
					嫡 孫過庭			嫡	嫡 五經・女部	
嬉	キ うれし いたのし む あそぶ 人①	嬉 甲骨				嬉 王獻之	嬉	嬉		
嬢	ジョウ むすめ 常①		嬢 説文・女部					嬢	嬢 豊替指歸	
嬢	人②	嬢 甲骨								
娘	ジョウ ニユウ むすめ 常①								娘 香港	
嬰	エイ あかご めぐる ふれる ①	嬰 金文	嬰 睡虎地秦簡	嬰 包山楚簡	嬰 説文・女部	嬰 銀雀山竹簡	嬰 熹平石經	嬰 崔敬臣墓誌	嬰 等慈寺碑	嬰 聖武天皇雜集
孀	ジュ つま よわい ①		孀 説文・女部							

【嫉】2010年(平成22年)に常用漢字表に追加された。説文解字に人偏の異体字がある。

【嫡】五經文字は干祿字書の傍の点の角度を説文篆文に倣って修正している。康熙字典も同様。

【嬉】説文解字にないので、篆書では「嫉」を書く。甲骨にあ

る字は現在の字と同字種かどうか疑わしい。

【嬢】異体字の「嬢」は人名用漢字でJIS第二水準にある。『教育上より見たる明治の漢字』に「嬢」の許用字として「娘」が載っている。中国では「娘」と「嬢」が「娘」に統合されている。「娘」は甲骨にあるが人名として使われているにすぎ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
嫁	嫁	嫁	嫁	嫁			嫁	嫁	嫁	嫁		嫁 中国
嫁	嫁			嫁								嫁 台湾 嫁 香港
嫌	嫌			嫌				嫌	嫌			嫌 平安・藤原俊成 嫌 中国
嫌	嫌			嫌								嫌 台湾 嫌 香港
嫉	嫉			嫉				嫉				嫉 中国
												嫉 台湾 嫉 香港
嫡	嫡			嫡				嫡	嫡	嫡		嫡 中国
嫡	嫡			嫡								嫡 台湾 嫡 香港
嬉	嬉			嬉				嬉	嬉	嬉		嬉 台湾 嬉 香港 嬉 中国
嬢	嬢			嬢				嬢	嬢	嬢		嬢 段注・女部 嬢 中国
				嬢				嬢	嬢	嬢		嬢 台湾
												嬢 台湾
嬰	嬰			嬰				嬰				嬰 台湾 嬰 香港 嬰 中国
孀	孀			孀								孀 台湾 孀 香港 孀 中国

ず亡したとおもわれる。「嬢」は説文にあるが古代の字に見えない。漱石は略しすぎ。太宰の「嬢」は「口」が二つ繋がっている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆書	隷書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
孜	シつとめる 人①		𠄎	孜	孜	孜	孜	孜	孜
学	ガク まなぶ 教1常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
學	②		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
孝	②		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
孟	モウ マン ボウ はじめ 人①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
孤	コひとり みなしご 常①		𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
孫	ソン まご 教4常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
安	アン やすい いずくんぞ やすんじる 教3常①	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎

【孜】説文解字では支部にある。

【学】説文解字では教部にあり、「學」は「斆」の省とある。康熙字典では「學」は子部に、「斆」は支部にある。干禄字書の例と比較すると孔子廟堂碑の字体が〈正〉で九成宮醴泉銘の字体が〈通〉。

【孟】石門頌では説文古文と同じように「子」の左右に点がある。居延漢簡では「子」の横線が1本多いが、これは左右の点がつながったものかもしれない。

【孤】日本の常用漢字では子部の6画だが、康熙字典と中国では子部の5画。後漢の隷書から初唐まで「瓜」ではなく

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん ころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
		孜	孜									孜 中・台・香
学	学	學	學	学	學	學	學	学	学	学	斆	学 U+6585 中・台・香
學	學	斆	學	学	學	學	(學)				學	學 干禄(通)
各			斆	学								
孟	孟	孟	孟	孟			孟					孟 中・台・香
孤	孤	孤	孤	孤			孤	孤	孤	孤		孤 中国
			孤								孤	孤 台湾 香港
孫	孫	孫	孫	孫			孫	孫	孫	孫		孫 中国
			孫									孫 台湾
			孫									孫 香港
安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安	安 中国
			安									安 台湾
			安									安 香港

「瓜」を書くようだ。五経文字では旁に「瓜」を書く字体を「訛」とする。

【孫】説文解字では系部にあるが、五経文字では系部にある。【安】権量銘と説文の字体が異なる。石鼓文、睡虎地秦簡、馬王堆、銀雀山竹簡が権量銘の字体と合致する。後漢以降、

「宀」の点と「女」をつなげて書く。干禄字書は〈宀〉を点二つに略した字体を〈通〉としている。漱石は「宀」を書いてから「女」を書いている。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
宇	ウの いえ								王勃詩序
宇	④								
寓	④								
守	シユ まもる もり かみ								王勃詩序
									空海座右銘
宅	タク いえ やけ								法華義疏
									王勃詩序
									空海新撰集
完	カン まっとう する								魏碑刻石
									五経・宀部
宏	コウ ひろ ひろい								王勃詩序
									道因法師碑

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
宇	宇	宇	宇				宇	宇		宇		宇 中国・台湾
		宇										宇 香港
		寓										
守	守	守	守	守			守	守	守	守	守	守 漢・乙瑛碑 中国・台湾
		守		守								守 香港
		尊										
宅	宅	宅	宅	宅			宅	宅	宅	宅	宅	宅 中国
		宅		宅								宅 台湾
		宅		宅								宅 香港
		完	完	完			完	完	完	完	完	完 干祿(俗) 中国・台湾
				完								完 香港
宏	宏	宏	宏				宏					宏 中国・台湾
		宏										宏 香港

【宇】説文解字の大徐本と段注本の籀文の字体が異なる。説文の字体を楷書にすれば「宇」になるはず。康熙字典では「宇」と「寓」は別に載っている。

【守】漱石は『坊っちゃん』で「守」を「御留守」で2回、「留守」で1回の計3回使っているが、すべて草書で書いている。

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文・篆書 (殷・西周・春秋・戦国・秦)	説文解字 篆家	隸書 (前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
宀	ニク しし ①		甲骨 包山楚簡	睡虎地秦簡 説文・宀部	馬王堆 武威漢簡		孫過浮図録記 王知敬・李靖碑 干祿字書	瑠玉集	
肉	ニク 教2 帯①		甲骨 包山楚簡	睡虎地秦簡	馬王堆 史晨後碑		大般涅槃經① 五經・部首	法華義疏	
					新居延漢簡 武氏祠画像石			月	九經・部首
宋	ソウ 人①		甲骨 包山楚簡	睡虎地秦簡 説文・宀部	敦煌漢簡 禮器碑陰		孫秋生造像 伊闕仏龕碑	瑠玉集	
			甲骨 包山楚簡	郭店楚簡			鄭義下碑		
宛	エン あてる あて・ずつ あなかも さながら 帯①		甲骨 金文	睡虎地秦簡 説文・宀部	馬王堆 張景造十牛碑		王肅・元熹紀墓誌	五經・宀部	王勃詩序
			侯馬盟書 睡虎地秦簡	説文或体 居延漢簡	禮器碑陰				龔賢指歸
官	カン つかさ おおやけ 教4 帯①		甲骨 金文	睡虎地秦簡 説文・宀部	馬王堆 居延漢簡	十七帖 興福寺斷碑	元詳墓誌 九成宮	五經・序	杜家立成
					居延漢簡	石門頌			伝空海急就草
			包山楚簡		居延漢簡	曹全碑			
宜	ギ むべ よろしい 帯①		甲骨 金文	睡虎地秦簡 説文・宀部	馬王堆 史晨前碑	晉永千字文 樂毅論	元珍墓誌 九成宮	五經・宀部(段注)	王勃詩序
宜	③		甲骨 金文	戦国・金文 説文古文1	居延漢簡	北海相景君碑		五經・宀部(石經)	聖武天皇雜集
			甲骨 侯馬盟書	戦国・金文 説文古文2	居延漢簡				龔賢指歸
			殷・金文 包山楚簡	包山楚簡	段注古文2				龔賢指歸

【宀】「宀」と「肉」は異体字。「ニク」が音読みで「しし」が訓読み。常用漢字表の「肉」には音読みの「ニク」しか載っていない。説文解字では「にくづき」の形が載っている。干祿字書では「宀」は〈俗〉、「肉」が〈正〉。五經文字では「肉」が部首名として掲載。九經字様では「にくづき」が部首名と

して掲載。康熙字典には「宀」は宀部と「肉」の古文の両方にある。肉は肉部にあり、「にくづき」も肉部にある。
【宛】2010年(平成22年)に人名用漢字から常用漢字表に追加された。下に「心」がつく異体字がある。
【官】説文解字では宀部にある。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん こころ	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀	宀					宀 千祿(俗) 中国・台湾
肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	肉	宀 香港
				肉								肉 中・台・香
宋	宋	宋	宋				宋					宋 中国・台湾
												宋 香港
宛	宛	宛	宛	宛	宛		宛	宛				宛 中国・台湾
												宛 香港
官	官	官	官	官	官		官	官	官	官	官	官 中国・台湾
												官 漢・敦煌漢簡 香港
宀	宀											
宜	宜	宜	宜	宜	宜		宜	宜	宜	宜		宜 中国・台湾
												宜 香港

【宜】「宜」は異体字。手書きでは「宜」が書かれることが多い。説文解字の大徐本、段注本ともに篆文の他に古文が2つあるが、古文2は大徐本と段注本で微妙な差がある。